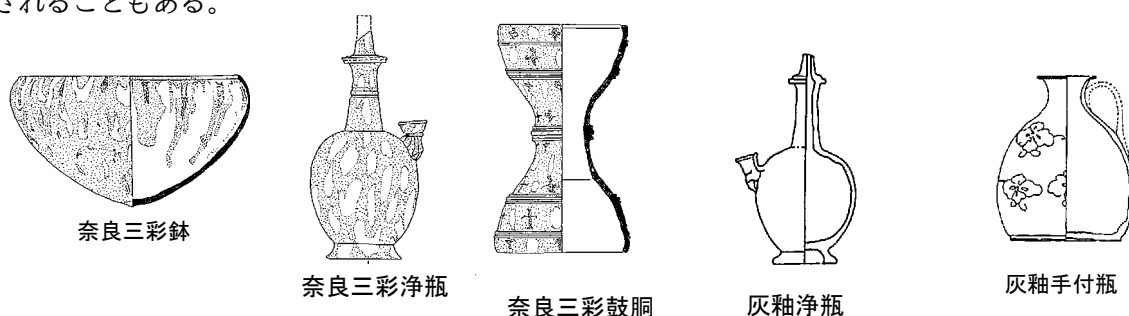


陶磁器のデザイン・モチーフ

—近世陶磁器を中心に—

陶磁器のデザイン（古代）

本邦における施釉された陶磁器の生産は、古代の奈良三彩や緑釉・灰釉陶器にはじまる。これらの施釉陶器には碗や皿のように従来までのデザインを踏襲したものと、大陸の影響を受けた、漳州窯青磁などの中国製陶磁や、金属製の仏具などを模した、いままで日本にはなかったデザインのものがある。またこれらに施される文様には宝相華文（ほうそうげもん）などの中国陶磁の文様が陰刻されることもある。



奈良三彩鉢

奈良三彩浄瓶

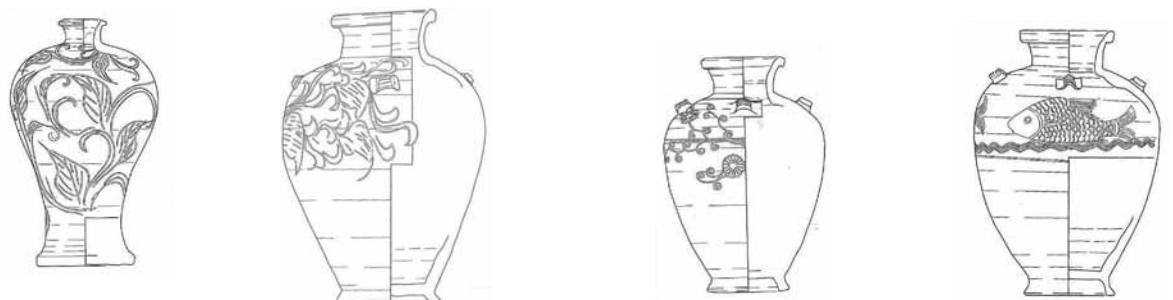
奈良三彩鼓胴

灰釉浄瓶

灰釉手付瓶

陶磁器のデザイン（中世）

平安時代の終わりから中世には、中世六古窯をはじめとして各地のに窯が築かれる。特に東海地方では、古代から操業してきた猿投窯のような窯のほかに、新たに多くの窯が築かれる。これらで生産された陶磁器のなかには、三耳壺や四耳壺、瓶などのように当時高級品であった中国産の青磁や白磁の製品をを模したと考えられるデザインのものも製作されている。これらの壺には文様を線刻やスタンプで押したものの、貼花などの装飾が施される場合があるが、そのモチーフには、輸入された青磁・白磁の文様を写したと思われるもの以外に、秋草文や連弁文、芦鷺文、菊花文などの中国の製品には見られない大和絵風の文様がみられるようになる。



瀬戸唐草文瓶子

瀬戸唐草文四耳壺

瀬戸印花菊花唐草文四耳壺

瀬戸魚波文四耳壺

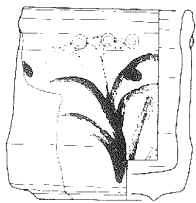
陶磁器のデザイン（中世後半）

中世後半の16世紀半ば以降には従来より施釉陶器を生産していた東海地方の瀬戸・美濃では、中国の青磁や白磁、天目茶碗等の施釉陶器を写した陶器が生産される（唐物写し）。

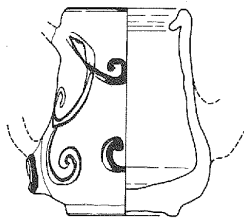
一方では従来の中世陶器と異なる陶器が生産され、同時に種類も増加している。これらまったくあたらしい形で、色彩感覚に富んだ陶器の誕生には、茶の湯の隆盛が大きな役割を果たしている。

これら茶道に影響を受けた陶器は備前・伊賀・丹波・信楽・唐津でもつくられており、その器形は元来日常雑器をモチーフにしていたと思われるが、茶陶として作られたたことにより、円形から離れ・歪みが明確に意識され、もととなった器形から大きく離れた造形となっていく。17世紀初頭に瀬戸・美濃窯で生産された織部焼には州浜形、扇形、松皮菱形等のまったく新しい器形のものみられるようになる。

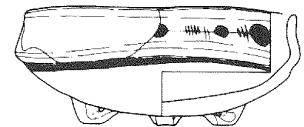
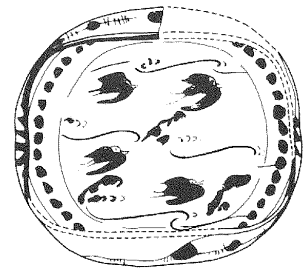
これら中世後半の陶器にはさまざまな文様が施されるが、そのモチーフは中国製陶磁器の文様を写したもの、秋草文や、芦鷺文、菊花文などの日本風なもの、また織部焼きに多く見られる新しいデザインのものもみられる。これらの文様に影響を与えた中国製陶器の中に、中国南部でつくられた施釉陶器である華南三彩がある。あざやかな緑色をメインとしたカラフルなその模様や形は日本の瀬戸美濃系陶器に影響を与えたといわれている。これらの文様には線刻やスタンプだけでなく、鉄釉などで器上に絵を描く従来にはなかった方法である下絵付けによりほどこされたものがある。志野焼、唐津焼、織部焼に多く見られる手法である。



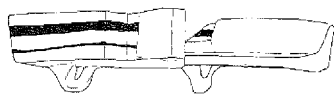
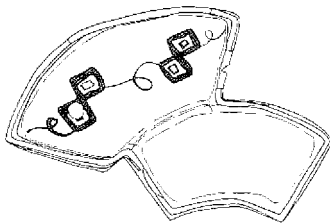
志野向付



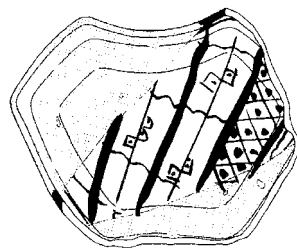
志野向付



志野向付

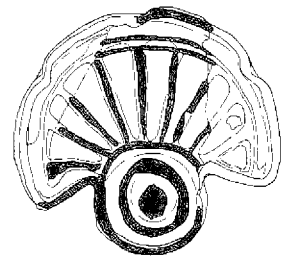


織部向付

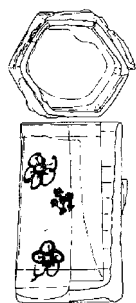


裏

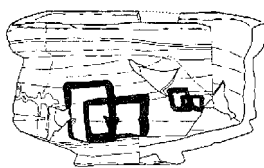
織部向付



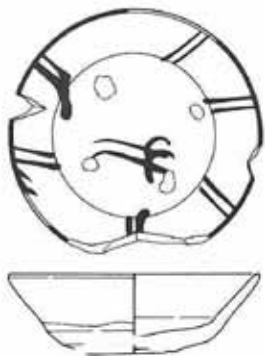
織部向付



織部向付



織部茶碗



唐津皿



唐津皿



唐津皿

陶磁器のデザイン（近世）

元時代（1271～1368）中国では白色素地に酸化コバルトの釉薬で文様を描き、透明釉をかけて焼成した磁器、いわゆる青花の技術を完成させ、中近東などに多く輸出される。明代（1368～1644）その技術は洗練され、日本にも14世紀末頃から輸入され、15世紀後半には爆発的に輸入量が増加する。国産施釉陶器の流通が少なかった西日本ではとくに多く使用される。

本邦におけるの磁器生産は17世紀初頭の1610年ごろに有田においてはじまる。生産が始まった当初は国内でも未だ中国製青花が主流を占めており、国産磁器のデザインはこれらを写したものが多い。また描かれる文様もこれらの磁器に施された文様のモチーフも中国の磁器の文様をもとにしたものが多い。

17世紀中葉には中国における明末清初の動乱のため、中国製磁器の海外への輸出が難しくなったことにより、オランダ東インド会を介し日本産磁器が海外へ多量に輸出されるようになる。これらは当時の主流であった中国産青花の文様を写し、また器形のデザインは海外からの求めにより従来の日本の陶磁器にはない物がつくられる。

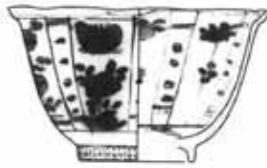
一方17世紀中葉頃からの生産量の増大に伴い、国内にも伊万里産磁器の流通量が増大し、文様も大和絵をモチーフにしたと思われる和様の文様の製品も作られるようになる。和様の文様は、その後海外への輸出が急速に減少した18世紀以降には、国産磁器における主要な文様となる。

また同じ頃から、国内に流通する陶磁器のデザインにもバリエーションが増えてくる。18世紀に

は碗・皿、鉢といった従来までの器形に加え土瓶、行平鍋、などの現在も使用されている器形の製品が作られる。これは大量消費社会の始まりともいえる近世において、食生活の多様化をはじめとした生活文化の向上に起因するものである。



景德鎮青花碗



景德鎮青花鉢大碗



景德鎮青花鉢



漳州窯青花碗



漳州窯青花碗



漳州窯青花大皿



漳州窯青花碗



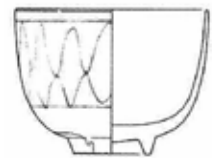
近世初頭中国産磁器の例（景德鎮・漳州窯）



国産磁器小杯（17世紀前半）



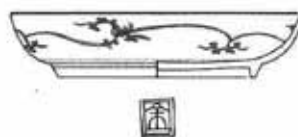
国産磁器五寸皿（17世紀後半）



国産磁器小碗（17世紀後半）

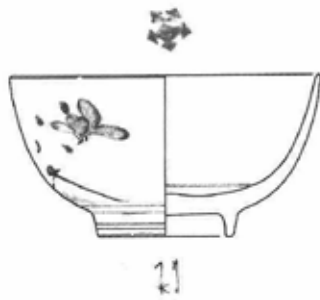


国産磁器五寸皿（17世紀中葉）



国産磁器小碗（17世紀後半）

近世初頭の国産磁器の例（17世紀代）



国産磁器大碗 (18 世紀前半)



国産磁器大碗 (18 世紀前半)



国産磁器小碗 (18 世紀中葉)



国産磁器小碗 (18 世紀前半)



国産磁器小碗 (18 世紀前半)



近世中葉の国産磁器の例 (18 世紀代)

第二 見立てて養子が利発

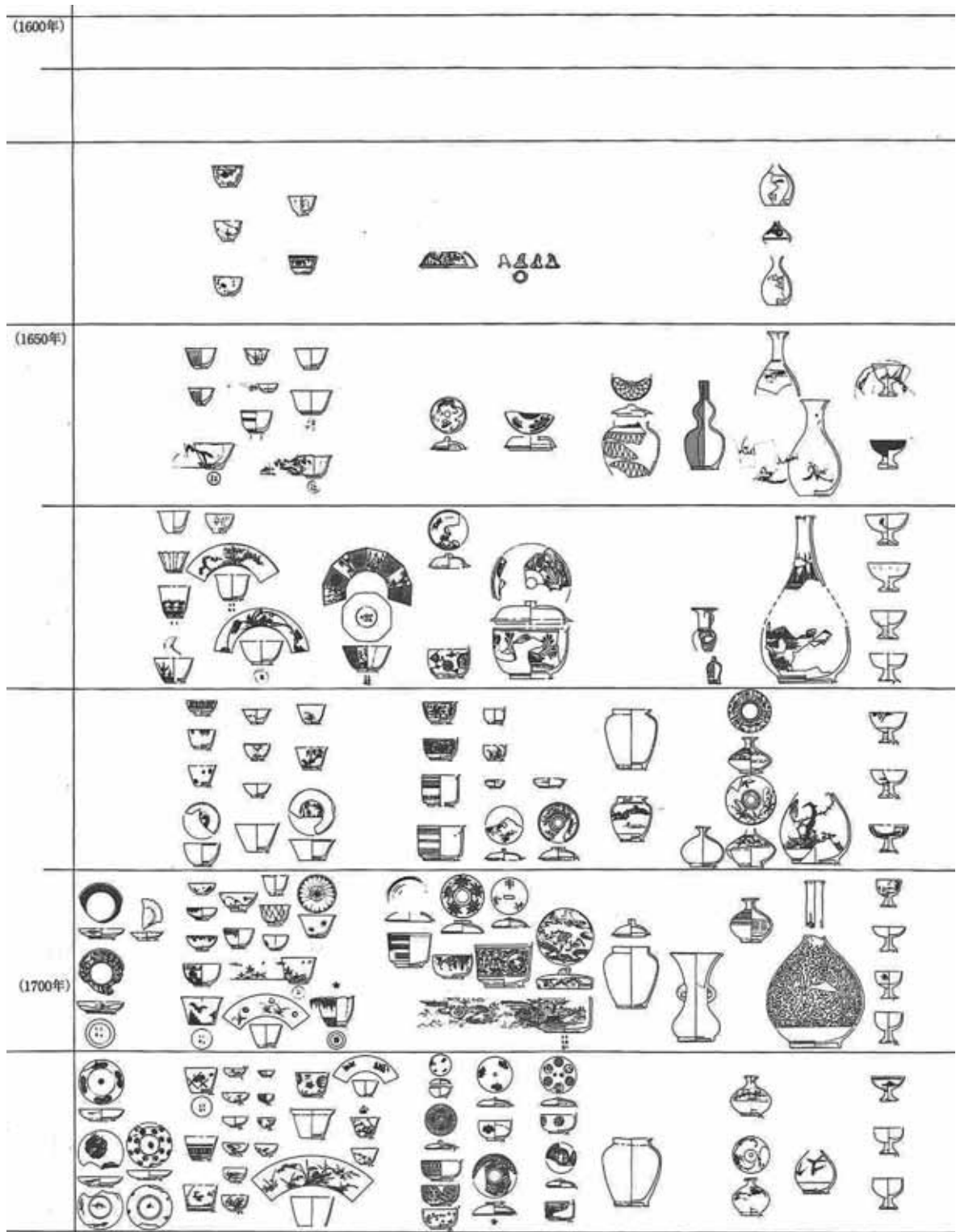
和国の商ひ口とて、「利徳を取らぬ」と空言文を立つれば、これに心を許し、何にやら買ひ求むる世の習はしなり。神田の明神の前に、俗姓歴々の浪人身を隠して、年も家に杖つく頃なれば、さのみ主取りの望みもなく、小者一人使うて、一代の貯へ有りて、世をなりはひに暮し、徒居を外よりの咎めをうたて、瀬戸物見せかけばかり出し置き、値段問ふものあれば、百の物を百と、有りのままに言ひければ、これを値切れど負けず。店を始めてから、**香鉢十三・皿四十五枚・天目二十・徳利七つ・油さし二つ、三年あまりに一つも売れず。これを思ふに、商ひ上手はあるべき事なり。**

井原西鶴「日本永代蔵」(貞享五(1688)年)

材質	品目	購入	贈答		補修 修理	ほか 不明	小計
			買物	贈物			
陶磁器類	茶漬茶碗・茶呑茶碗・茶碗・猪口・盃 杯・鉢・皿・蓋物・徳利・瓶・摺鉢・ 土瓶・行平・火入・壺蓋・湯水入・戸車	41	5	4	16	5	71
土器類	燈明土器・はうろく・火鉢・火消壺	7	1	0	0	0	8
漆器類	膳碗・碗・坪・平・腰高・膳・膳箱・ 茶盆・通盆・盆・黒堅地・菓子鉢・重箱・ 弁当箱・盃台・耳壺・箸ほか	33	0	3	13	0	49
木製品	桶・壺・沢・柄杓・杓子・味噌こし・ まな板・飯櫃・飯櫃入・膳棚・杉箸・ 白箸・ささら・釜蓋・箕・釣瓶ほか	96	1	0	156	1	254
金属製品	鍋・釜・やかん・鉄瓶・茶釜・真鍮火鉢・ 唐銅火鉢・提灯・五徳・銅壺・赤銅壺・ 火箸・燭台・包丁ほか	38	0	0	38	0	76
その他 材質不明	貝杓子・塩かまど・猫火鉢ほか	8	0	0	2	0	10
	小計	223	7	7	225	6	468

「関口日記」にみる 18 世紀後半～19 世紀前半に購入された

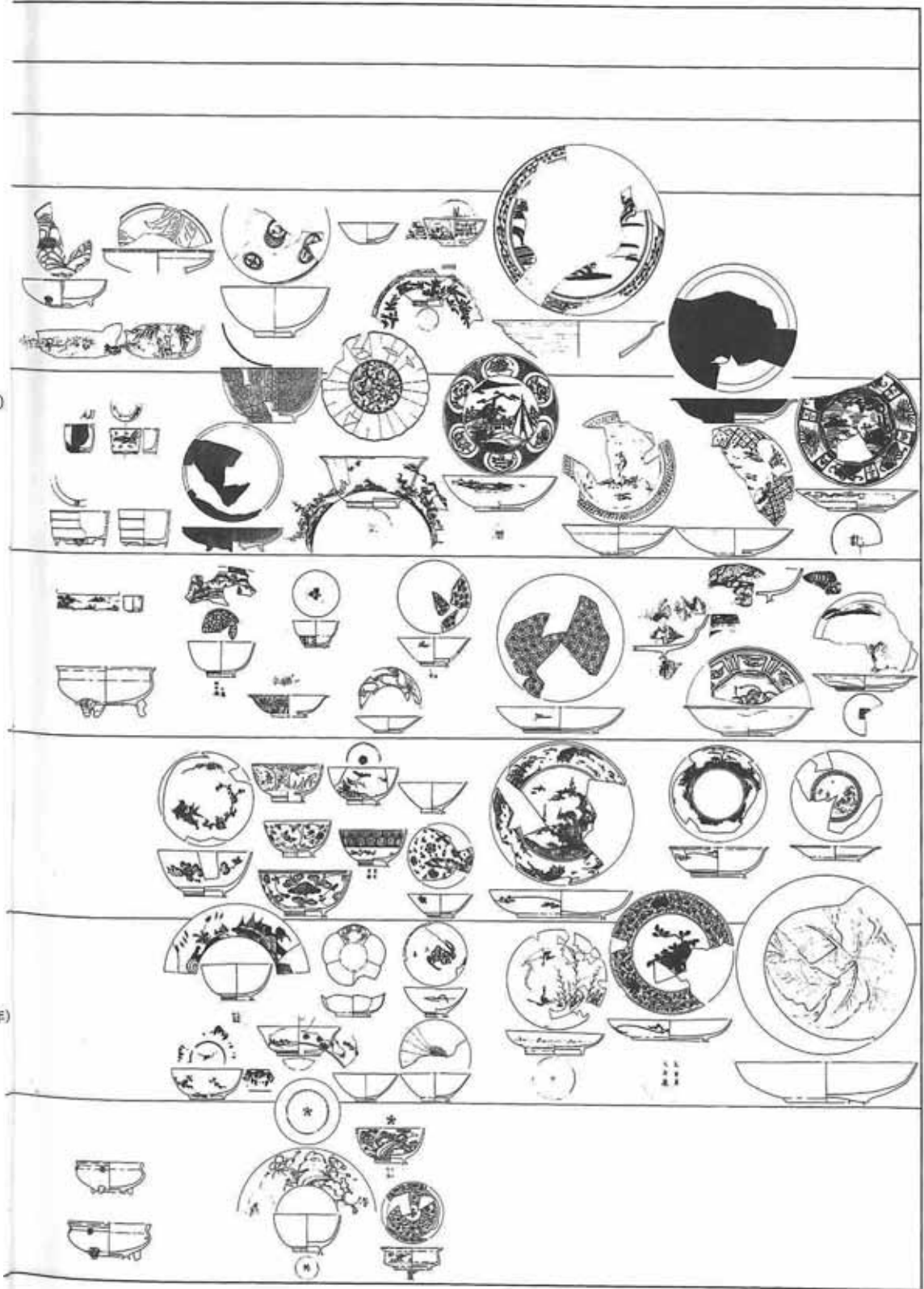
物品一覧 (森本伊知郎「陶磁器に見る発掘資料と文献資料」季刊考古学代 53 号 1995)



国産磁器の編年 1 (17世紀～18世紀前半)

(江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学事典』柏書房 2001)

(1650年)



(1700年)

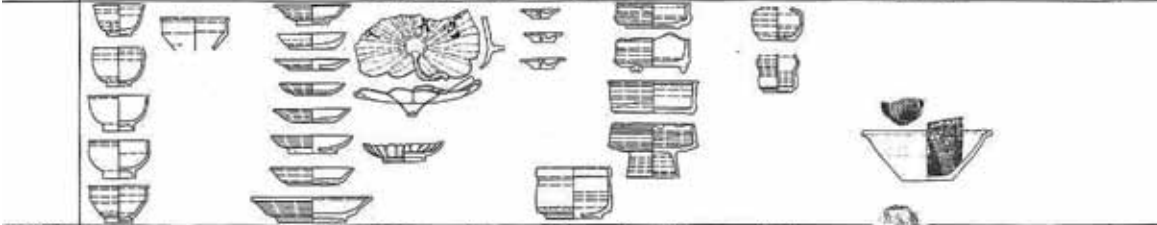
国産磁器の編年2 (17世紀~18世紀前半)

(江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学事典』柏書房 2001)

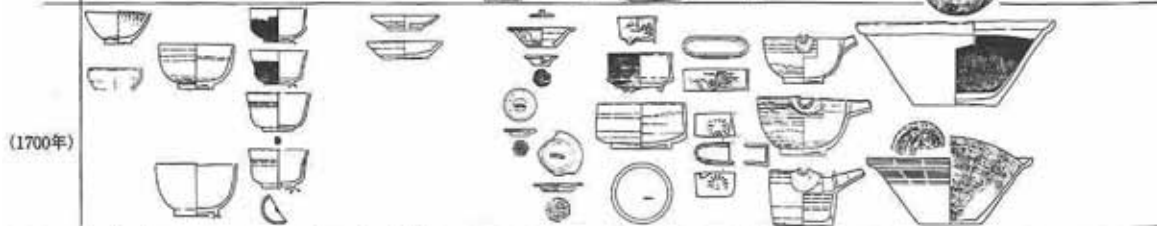
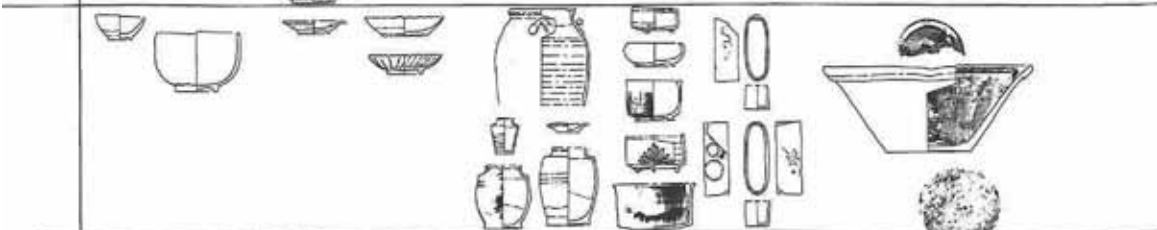
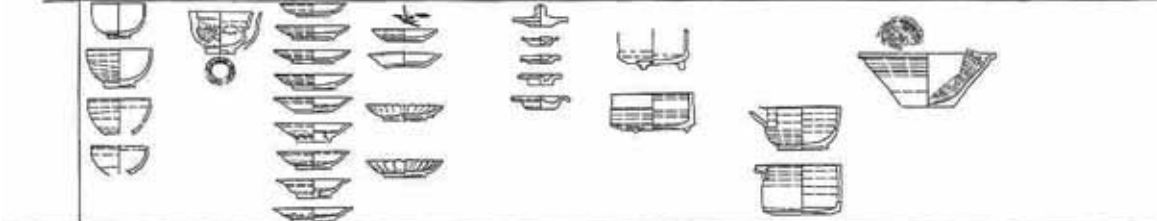
0 10 20cm

瀬戸・美濃

(1600年)



(1650年)



(1700年)

瀬戸美濃陶器の編年 (17～18世紀前半)

(江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学事典』柏書房 2001)